

There is no grief if it is prepared

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-11-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Taniguchi, Takumi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00052707

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



備えあれば憂いなし There is no grief if it is prepared

金沢大学医薬保健研究域医学系 麻酔・集中治療医学
谷 口 巧

2018年6月18日大阪府北部を震源とする最大震度6弱地震で4人が死亡、434人が負傷し、まだ多数の人が避難を続けている状況で、今度は6月28日から7月8日にかけて西日本を中心とした集中豪雨が発生した。河川の氾濫、洪水、土砂災害などの被害により、200人以上が死亡、多数の人が避難をしている。さらに台風が追い打ちをかけ、想定外の災害が生じている。近年、報道番組では、想定外、未曾有の被害、記録的な災害という言葉をよく耳にする。これまで報道されることが少なかった言葉を耳にし、他人事のように聞いていた言葉であったが、今年に入り、北陸でも「五六豪雪」以来37年ぶりの記録的な大雪となり、多数傷病者が発生し、さらに交通路の遮断、物資不足といった被害まで生じた。日本中どこにいても自然災害は起き、自分たちも被害者になりうることを痛感した。さらに、災害には備えることが肝心であり、「備えあれば憂いなし」を再認識した。現在、「備えあれば憂いなし」の状態なのであるか？ 災害に対してしっかり準備されていて、対応できるのでしょうか？ もし、医療現場で、従事中に災害が生じた場合、患者はもちろんスタッフに配慮しつつ災害対応することができるのでしょうか？ より身近に思われる火災が万が一発生した場合にすぐに対応できるのでしょうか？ 近年の災害報道を見ていつも自問自答している。

2013年金沢大学附属病院手術室で電気メスによると思われる火災が生じた。火花がデッキに引火し瞬間に炎が上がり、麻酔器と患者をつなぐ蛇菅が燃えた。手術していた外科医がすみやかに消火し、担当していた麻酔科医が直ちに人工呼吸を行い、幸いにも患者は無事であり、合併症もなく事なきを得た。この件を踏まえて、当院麻酔科医が、火災・災害に関してどこまで関心があり、対応できるのかを知りたくなり、アンケート調査を行った。まずは、消火器がどこにあるのか？ 消火器の使い方を知っているのか？ から始まり、実際手術中に火災が生じた場合どのように対応するか順に記載せよ？ 別室で火災が生じた場合どのように対応するか順に記載せよ？ といった火災に関して回答してもらい、さらに手術中に震度6の地震が起きた場合どのように対応するか順に記載せよ？ と地震についても質問した。

アンケート調査の結果、多くの麻酔科医が手術室内の消火器、消火栓の場所や消火器の使い方を知らないことが判明した。実際に火災が生じた場合、多くの麻酔科医が自室、別室問わず手術を中止させ、患者に被害が及ばないように対応することを最優先として考えており、地震に関しても患者安全を第一に早急に手術を中止し、経過観察すると回答した。さらに、自由回答欄には火災や地震が起きる実感が湧かない、本当に火災や地震が起き

た場合何も出来ないと思う、訓練の必要性を感じた、といった記載があった。これらの意見は、消火器の位置や使用方法について大変恥ずかしいものであるが、日常業務、日々の麻酔に追われそこまで手が回らないといった状況が推察された。また、火災、地震が生じた際には正しく行動できるように記載していたが、実際災害が生じた場合にはどう行動するのか、迅速に行動できるのか疑問が残った。以上より、麻酔科医の手術中の災害対応に関する意識は様々であり、現在災害が生じると対応に苦慮することが想像できた。これでは患者の命も守れない、いやスタッフ、自分自身の身も守れないことが予想でき、災害対応に関して早急に知識、スキルの向上を目指す必要があると痛感した。

現在、手術室の災害に関するマニュアルを再検討し始めた。即座に対応できるように改訂し、アクションカードも作成し、手術室スタッフに周知徹底させている。また、手術室内での災害講習会を開催し、スタッフの災害に関する知識の向上に務めている。一般的な災害対応に関する教育に関しては、日本災害医学会主催の災害セミナーをはじめ、多数傷病者への対応標準化トレーニングコース (MCLS)、災害薬事研修コースといった教育コースが開催されている。そのほかNational Incident Management System (NIMUS)、National Disaster Life Support (NDLS) と言った海外の災害教育コースが日本で開催されるようになった。大変ありがたいことであり、希望があれば教育機会は増してきている。自施設での対応や災害教育コースの広まりは災害への関心の高さの表れと考える。しかしながら、本当に災害対応に結びついているのでしょうか？ まだまだ不十分であろうと思っている。災害対応の難しさとして、①災害自体へ関心がない、②災害を経験していないために理解しがたい、③災害対応に関する講習を受講しても時が経つと忘れてしまう。④実際に災害が生じた場合、どう行動して良いかわからない、が挙げられている。これらを打開するには、平日頃災害に関心、興味を持ち、災害教育を学び、災害活動に参加するといった行動を頻回に行うことが重要であろう。災害は他人事ではなく、いつ自分の身に降りかかるかわからないものである。

もう一度自問自答する。災害に対する準備は万全か？ 何が足りないか？ どうすれば良いのか？ 現在「備えあれば憂いなし」の状態であるのか？

もっともっと災害に関心を持ち、災害時には積極的に行動することを願うばかりである。

末筆となりますが皆様のご健康とご発展をお祈り申し上げますとともに、巻頭言の寄稿の機会を頂きました十全医学会編集委員長の土屋弘行教授に深謝いたします。